

有明海・橘湾におけるガザミの生態について

長崎県総合水産試験場

漁業資源部栽培漁業科

ガザミは、青森県以南の日本周辺から韓国、黄海、東シナ海、台湾までの広い海域に分布しています。別名ワタリガニとも呼ばれ、オール状になった脚を動かして、水中を泳いで移動することが知られています。

資源回復を図るため、平成二〇年度から「有明海ガザミ資源回復計画」に取り組むこととなり、その一環として産卵期間（六～八月）のうち十五日間はタモすくい網漁による採捕を禁止しています。

以前は有明海の湾央・湾口部では、ガザミを獲る漁法がほとんどありませんでしたが、近年、海面近くを泳いでいるガザミをタモ網等ですくって漁獲する「タモ網その他のすくい網漁業（通称：タモすくい網漁）」と呼ばれる漁法が行われるようになってきました。

今回は、この漁法で漁獲されたガザミに注目して調べた結果から分かった有明海・橘湾に分布するガザミの移動等の生態についてご紹介します。

【漁獲物組成調査】

タモすくい網漁は主に五～八月に操業が行われます。図一のように五～六月には抱卵した全甲幅長一九〇㎜前後の大型雌が多くを占めます。その後、七月頃になると一五〇㎜前後の小型雌雄が主体となる組成に変化してきます。これまでの調査から五～六月に漁獲される大型雌は二年前に生まれた群、七月頃からの小型雌雄は前年に生まれた群が主体であると考えられています。これらの調査結果を基に、有明海に面する四県の漁業者等が話し合った結果、ガザミ

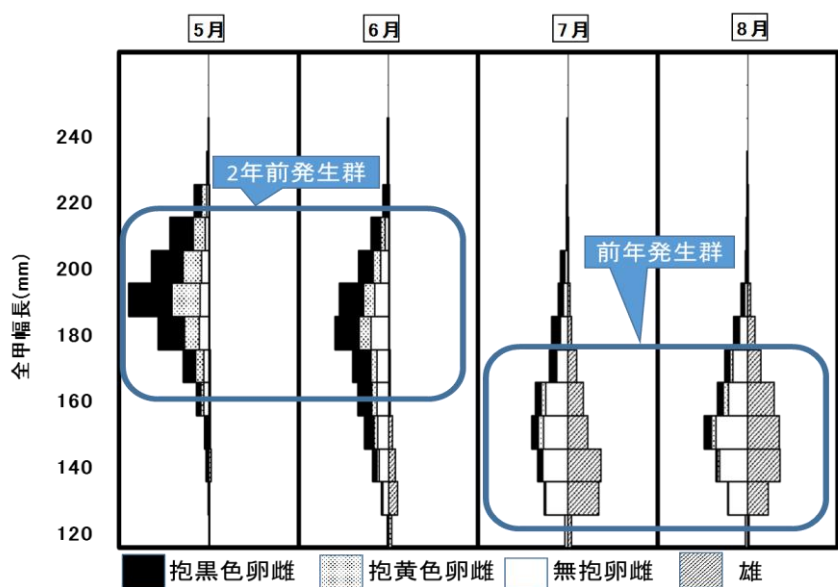


図1. タモすくい網漁における月別漁獲物組成

【移動調査】

有明海の湾央・湾口部で漁獲されるガザミの移動生態を調べるため、写真一のように、甲羅にペイント等で標識を施したガザミを放流し、再捕状況を調べました。五～六月に漁獲される大型雌は、ほとんどが放

流場所周辺から橘湾で再捕されました(図二)。これまでの調査でも有明海の湾奥部から大型雌の標識放流をすると橘湾に向けて

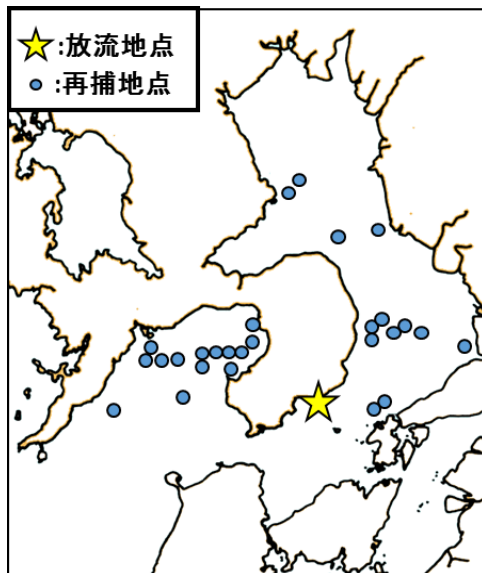


図3. 小型雌雄放流群の再捕場所

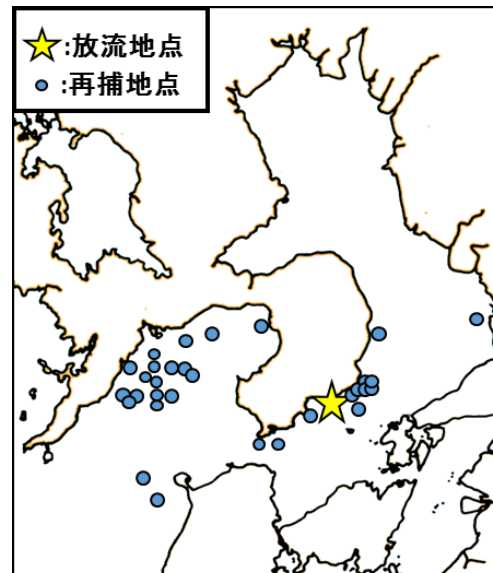


図2. 大型雌放流群の再捕場所



写真1. ペイント標識放流ガザミ

移動していることは知られていましたので、その結果を支持する形となりました。ところが七～八月に漁獲される小型雌雄は、放流場所から橘湾方向だけでなく有明海の湾奥部でも再捕され、広範囲に移動していることがわかりました(図三)。

【漁獲量調査】

七～八月にタモすくい網漁で一隻あたり一日に漁獲される小型雌雄の漁獲量と翌年六～七月に漁獲される大型雌の漁獲量の関係を図四に示します。すると小型雌雄が多く獲れた場合は、翌年の大型雌が多く獲れる傾向にあることが分かりました。

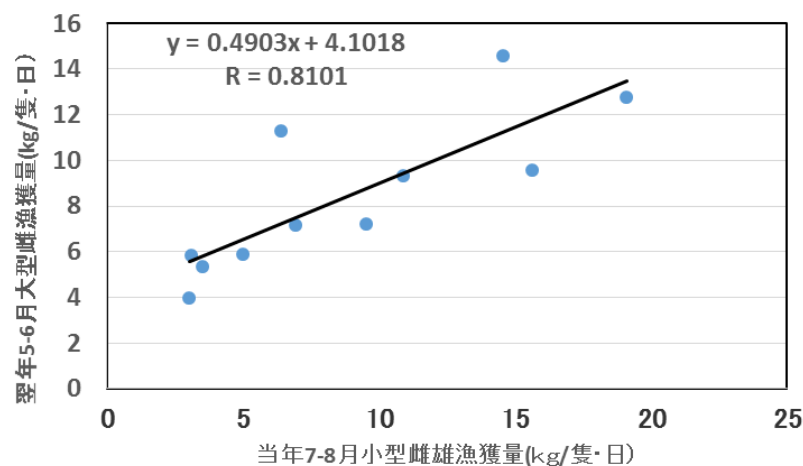


図4. 1日1隻あたりの当年7-8月小型雌雄漁獲量と翌年5-6月大型雌漁獲量の関係

これらの調査結果から、前年の夏にタモすくい網漁で漁獲される有明海の湾央・湾口部の海面近くを泳いでいる小型ガザミは、一旦橘湾や有明海湾奥部等に移動して秋にはいなくなるものの、雌は成長し、翌春に再びタモすくい網漁場へ卵を抱えて現れ、放卵しながら

ら橘湾方向へ移動していると考えられます。

一方、図一が示すとおり五〇六月に大型雄はほとんど出現しません。大型雄は有明湾奥部や橘湾で実施した漁獲物組成調査の結果でも、秋までは成長しながら出現し続けますが翌春にはほとんど出現しなくなります。このことから橘湾や有明海湾奥部等で冬の間に寿命を迎えているものと考えられます。

【今後の課題】

タモすくい網漁で漁獲されるガザミの調査から有明海・橘湾に分布するガザミの移動等の生態が分かってきました。しかし、七〇八月にタモすくい網漁で漁獲される前年生まれ的小型ガザミがどこから来ているか等、未だ解決できていない課題も残っています。

一方、現在、有明四県の研究機関等では人工種苗を用いた標識放流調査・研究を連携して進めています。これらの研究が進めば、種苗放流の効果に関する課題だけでなく、漁獲サイズ前の移動生態等の知見に関する課題の解決も期待できることから、ガザミ資源の効果的な管理手法の議論も進むものと考えられます。今後も四県研究機関等との連携も深めながら、ガザミ資源の回復につながるよう、より一層努力していきたいと思えます。

（担当 鈴木洋行）